

地縁・血縁にもとづく連鎖移動論を乗り越えて

——中ジャワ州ソロ地方出身のモノ売りの事例から——

間 瀬 とも 子

《要 約》

インフォーマルな、しかしインテンシブな聞き取りにもとづいて、中ジャワ州ウォノギリ県東部の棚田地帯に属するジャティプルノ郡A村から発生する、モノ売りとしての出かせぎを詳細に追うなかで、出かせぎ先やそこでの出かせぎ商売の多様性を具体的に提示するとともに、地縁・血縁が村びとの出かせぎ先・出かせぎ商売の選択に果たす役割を考察する。

「インフォーマル・セクター」で活動する出かせぎモノ売りが論じられる場合、厳しい経済社会環境が待ち構える出かせぎ先（とくに都市部）で生き残る手段として、地縁・血縁がしばしば強調されてきた。こうしたつながりが存在するのは、確かである。しかしもう一步踏み込んで、そのつながりの性質を調べてみると、出かせぎモノ売りにこれまでとは違った印象を抱くことになる。すなわち、家族的紐帯にただぶら下がっているわけではなく、自立的・戦略的に立ち回る、積極的な出かせぎモノ売り像が浮かび上がってくる。

はじめに

- I ソロ出かせぎ送り出し圏からの出かせぎ
——中ジャワ州ウォノギリ県ジャティプルノ郡の事例——
 - II ジャティプルノ郡A村での出かせぎ先・出かせぎ業種にかんする調査
 - III 出かせぎの「ポートフォリオ・セレクション」
——出かせぎ家族の家系図——
- むすび

はじめに

モノ売りをふくむ、インドネシアの「インフォーマル・セクター」^(註1)にかんする実証研

究は、「都市のなかのムラ」^(註2)の概念をもって、家族や友人や知人を頼って出かせぎがおこなわれるため、出身地と出かせぎ業種との間に高い相関関係があるという連鎖移動^(註3)論 [Hugo 1977 など] を踏まえて進められてきた。ヒューゴが説明するとおり、たくさんの地方（とくに農村）の出身者が「インフォーマル・セクター」に従事し、彼らは出かせぎ先の都市に定住する場合もあれば、頻繁に出かせぎ先と出身地とを往復する（循環型移動をする、一時的移動をする）場合も多い。実質的な経済成長や発展をともしない都市が農村からの流入者を受け入れて貧困を分かち合う、都市インヴォリユー

ションが起こっていると分析したのは、Evers (1975) である。

本稿では、中ジャワ州ソロ地方^(註4)の特定地域の出身でインドネシア各地へ出かせぎをおこなってきた人びとにたいする聞き取りをもとに、出かせぎにおける地縁・血縁の役割にまつわる従来型の説明を批判的に検証し、「インフォーマル・セクター」従事者、とくにモノ売りを都市インヴォリューションの枠組みで眺めることを見直していく。

これまで、出かせぎ経済活動に果たす地縁・血縁の重要性から、連鎖移動・連鎖就職が発生し、出かせぎ先や出かせぎ業種の選択においてインヴォリューション的な状況が発生するとみられてきた。それは、先行研究が採用した調査方法に、出かせぎ者を取り巻く地縁・血縁が強調される要素が多くふくまれていたことが一因のように思われる。たとえば、ある人の出かせぎにかんする調査をおこなう場合、その人の特定時点における出かせぎのみをあつかい、その過去をほとんど問わず、これまで何回出かせぎ先や出かせぎ業種を変えているのかいないのかについての検証が、十分になされてきたとは言えない^(註5)。だれの伝手(叔父の伝手か、伯父の伝手か、母方の伝手か、父方の伝手か、隣村のだれの伝手かなど)をもちいて、いつからどこへ出かせぎに行くようになったか、地縁・血縁の内訳やその実際の使い方が詳述されたこともあまりない^(註6)。

結論から述べれば、ここを精査しないかぎり、出かせぎ研究はたいてい、地縁・血縁にもとづく単純な連鎖移動論に絡めとられてしまう。その理由は、特定時点における特定個人の出かせぎ先や出かせぎ業種の選択は、ごく表面的には

特定の家族成員や友人に依存しておこなわれているようにだけ映ってしまうからである。ところが、その選択がどのようにおこなわれているかを具体的に確認するにつれ、ある人に与えられている選択肢の幅が思いのほか広いこと、そして選択の変更はかなり頻繁におこなわれていることに気がつく。

ある時点でおこなわれているモノ売りの出かせぎは、一瞥したときに単純な連鎖移動や連鎖就職に見えるから、同郷人との村落共生メカニズムを保持することによって、出かせぎ先での商売や生活を保障しようとするという都市インヴォリューション的なモノ売り像につながる。地縁・血縁を検証しながら、このようなモノ売りにたいする見方を今一度振り出しに戻すことが、本稿の目的である。聞き取りのなかで、出かせぎモノ売りは、状況に応じて合理的かつ戦略的に出かせぎ先や出かせぎ業種を選択している事実を数多く発掘した。ある一時点の出かせぎ様式(本稿では、出かせぎ先と出かせぎ業種にしばる)の選択をあつかって、単純化されたモノ売り像を切り取るのではなく、細かな個人史を拾い上げつつ、当該個人が自分の出かせぎ経済活動を長期的にどのように切り盛りしているか、その過去も、未来への予想もふくめて、総体的に出かせぎモノ売り像を観察する。

同郷会や同業者の組合など、出かせぎ先に形成された出かせぎ者グループに着目する調査がある[加藤 1983; 山下 1986 など]。これらの調査によって、特定出かせぎ先における特定集団の経済活動も明らかにされてきた。とはいえ、家族主義や集団意識そのものを出発点とし、同郷意識を基盤とする家族的紐帯の存在を前提とする同郷会の研究は、特定集団の出かせぎ研究

そのものとはやや性質を異にする。出かせぎ研究においては、出かせぎ先での特定集団にたいして、家族的紐帯が機能しているのかいないのか、あるいはどの程度どのように機能しているかを問うことも重要である。

ある地方の村びとが農業以外の分野において生活の糧を探さざるを得なくなり出かせぎをおこなうことは、緑の革命^(註7)以降、農業の機械化や農業にまつわる人間関係の商業化によって初めてもたらされた現象ではない。緑の革命は、農村の余剰労働力を都市へ押し出した大要因のひとつではある [村井 1977；関本 1980；米倉 1986；加納 1988 など]。しかしそれ以前に、特定地域からの労働力流出はすでに頻繁に生じていた点に注目して出かせぎモノ売りの経済活動は語る事ができるし、語られなければならない。

自由主義経済を標榜し、インドネシア国家を挙げて工業化や産業化を推進する開発の時代 (1960年代末に始動する開発5カ年計画など、当時のスハルト大統領に主導される開発政策の時代) のなかで、①「フォーマルな」就業機会、あるいは「フォーマル・セクター」に付随する工場労働や建設現場での労働、そしてそれらの需要を見越したモノ売りとしての「インフォーマルな」経済機会が増えてきたこと、②交通手段の整備、③(マスメディアが発信するものも、出かせぎ先発組としての親族・知人がもたらすものもふくめて) 出かせぎ先にたいする情報が増えてきたことなどは、一般に地方から都市への出かせぎ活動を促進した。このような「開発の恩恵」のなかに登場する出かせぎ集団は数多くある^(註8)。緑の革命で農村を押し出され、1960年代末からの「開発の恩恵」のなかで都市に流

れてきて、そこで開発の波に翻弄されながら生きるモノ売りたちを、村井 (1978)、福家 (1986)、Jellinek (1991)、Murray (1994) などが描いている。ソロ地方出身のモノ売りたちによる出かせぎも、国家主導の経済開発とそれともなう「インフォーマル・セクター」の肥大化の影響を受けて変容を遂げてきた。とはいえ、国を挙げての経済開発政策が推進されたり、第三世界の都市労働力をよりよく把握する目的で、国際労働機関 (ILO) によって「インフォーマル・セクター」という用語が生み出される数十年前から、同地方出身者の出かせぎ経済活動は始まっている^(註9)。

本稿は、ソロ地方に属する特定地域からモノ売りとしての出かせぎをおこなう人びとが、どのような理由によって出かせぎ先や出かせぎ業種を選択しているか、その選択の際に、地縁・血縁はどのように、どの程度機能しているのかを分析する研究である。調査は2001年1月から段階的に開始され、2002年10月～07年9月の期間、ほぼ連続的にインドネシア・ジョグジャカルタ特別州スレマン県に滞在して集中的におこなった。質問票をもちいないインフォーマルな聞き取りが中心であった^(註10)。単独の出かせぎ先、あるいは単独の出かせぎ送り出し村ではなく、インドネシア全土を視野に入れて複数の出かせぎ先^(註11)、あるいはソロ地方のなかでひとつの圏をなしている複数の出かせぎ送り出し村をあつかい、各地で間歇的な調査を繰り返した^(註12)。

ソロ地方においては、ジャワ島各地のみならずインドネシア全土の各地へ特定販売物をあつかうモノ売り (ジャム一^(註13) 売り、バツソ^(註14) 売り、鶏そば売り、アイスクリーム売り、焼きそ

ば・焼きめし売り，ジャワ風そば売り，サウト^(註15)売り，プトゥ^(註16)売り，おもちゃ売り，たばこ売りなど)を生み出すひとつの圏(これをソロ出かせぎ送り出し圏と命名する)が存在することが、聞き取りによってまず明らかになった。同圏からモノ売りとして出かせぎに行く人びとは、インドネシアの「インフォーマル・セクター」において数で際立っている^(註17)。

本稿の構成にかんして、まず第Ⅰ節においてソロ出かせぎ送り出し圏にふくまれる中ジャワ州ウォノギリ県ジャティプルノ郡を事例に、出かせぎ経済活動がさかんになった背景を説明する。第Ⅱ節では、筆者がおこなったフィールドワークにもとづき、ジャティプルノ郡A村からの出かせぎ者数、出かせぎ業種、出かせぎ先などにかんするデータを提示しながら、同村からの出かせぎを精査する。さらに、いくつかの家系図をもちいて、ジャティプルノ郡A村をふくむソロ出かせぎ送り出し圏の出身であるモノ売りたちが出かせぎ先や出かせぎ業種をどのように選択しているかを分析したのが、第Ⅲ節である。

I ソロ出かせぎ送り出し圏からの出かせぎ

——中ジャワ州ウォノギリ県
ジャティプルノ郡の事例——

1. 棚田地方

ソロ出かせぎ送り出し圏からどのようにモノ売りとして出かせぎが発生しているか、その出かせぎにたいして地縁・血縁はいかなる役割を果たしているかを、最初に確認する。同圏の東部に位置する中ジャワ州ウォノギリ県東部

ジャティプルノ郡A村(kelurahan A, kecamatan Jatipurno, kabupaten Wonogiri, JATENG)でおこなった調査(2001年3~4月の約1カ月間、同村に住み込みで実施した調査が中心)をもとに、以下、論を進めていく。

ジャティプルノ郡は、ウォノギリ県の東部に位置する(図1「ジャティプルノ郡周辺図」を参照)。同郡の総面積は5546.4ヘクタール、ウォノギリ県で2番目に小さな郡である。ジャティプルノ郡の郡役場は、ウォノギリ県の県庁所在地から州道を約30キロ東へ進んだジャティスロノ(kecamatan Jatisrono)の町を、北に約3キロ入ったところにある。ジャティプルノ郡に属するほとんどの村は、標高500メートル以上であり、1000メートル以上の山地帯をふくんでいる。

隣接するジャティスロノ郡、ギリマルト郡(kecamatan Girimarto)、スロゴイモ郡(kecamatan Slogohimo)、ブルクルト郡(kecamatan Bulukerto)と並んで、ジャティプルノ郡には、棚田の景観が見られる。やせた山地であるとはいえ、村びとはこうした土地を農業、とくに水田耕作に利用してきた。現在、ジャティプルノ郡や隣接諸郡の棚田地帯には、同じ様式のモノ売りとして出かせぎ慣行が存在している。

聞き取りから、ウォノギリ県東部の村びとは、早くは1950年代から、そして70年~80年代をピークに、ウォノギリ県と西北で接するスコハルジョ県に属する平地のングトゥル郡周辺へと農業労働に誘われていったことがわかっている。

モノ売りとして出かせぎに行くようになる前、

ラン県にて、鶏そば売りのストゥさん（中ジャワ州ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村の出身、男性、40歳代）への聞き取り]。

ジャティプルノ郡からスコハルジョ県ングトゥル郡に農業労働者として出かける人が増えてきたのは、1970年以降である。妹のサキエム、甥のストゥ、姪のカルティも、頻繁にングトゥル郡に農作業に出かけていた[2007年6月20日、中ジャワ州ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村の出身のサティナさん（女性、60歳代）への聞き取り]。

前掲の図1にみるとおり、スコハルジョ県ングトゥル郡（kecamatan Nguter, kabupaten Sukoharjo, JATENG）は、ウォノギリ県の県庁所在地の北側に位置し、棚田地帯からソロ市の方向に州道を進むこと、およそ40～50キロのところにある。ングトゥル郡はジャワ最長の川ブンガワン・ソロ（Bengawan Solo）に面し、この川を介してウォノギリ県に接している。1981年にガジャ・ムンクル（Gajah Mungkur）ダム^(註18)が完成したことによって、長年苦しんだ水害から解放された。ダムの完成によってングトゥル郡周辺の稲作は、外からの農業労働力にますます依存するようになったが、ングトゥル郡における郡外の農業労働力にたいする需要は、先に示したとおり1980年代以前から生じている。すなわち、ダムができるずっと前からングトゥル郡の人びとは、郡での農業よりもモノ売りとしての出かせぎを志向してきたのである。

父は1930年ごろすでに、東ジャワ州ンガウィ県にアイスクリーム売りとして出かせぎ

に行っていた。わたしが子どものとき（1950年前後）、父の所有する水田は3枚あった。出かせぎ中の父や兄に代わって、プルワントロ郡やジャティスロノ郡などウォノギリ県東部から農業労働者を雇って、これらの水田は耕作された。水田耕起（荒起し、耕耘、田ならし）の時期にはいつも、ウォノギリ県からやってきた農業労働者たちが1週間ほど家に寝泊りしていたので、昔のことはよく覚えている[2007年7月4日、中ジャワ州スコハルジョ県ングトゥル郡にて、アイスクリーム売りをしていた人（故人）の娘マリクムさん（同郡の出身、女性、60歳代）への聞き取り]。

ウォノギリ県東部棚田地帯の出身者が地形的に険しい山地を階段状に切り拓き、苗を大切にみつかつて田植えをする技能や、彼らの仕事にたいするまじめさは、ングトゥル郡周辺において評価が高かった。ングトゥル郡周辺の水田所有者は、「ウォノギリ県東部の出身者に、自分の水田で働いてほしい」と思い、ウォノギリ県東部から農業労働者を次々にスカウトする。こうした評判に加え、農業労働者たちから「ウォノギリ県東部の出身村に有閑労働力が多い」との情報も耳にして、スコハルジョ県ングトゥル郡周辺の水田所有者たちは、ウォノギリ県東部の出身者をモノ売りとしての出かせぎにも誘うようになった。

ウォノギリ県東部やカラニアニャル県の出身者は、（モノ売りとして各地へ出かせぎに行く前に）まずスコハルジョ県ングトゥル郡界隈で農業労働者になった。なぜなら、ウォノギリ東部やカラニアニャルのなかには、土地が狭

い上に、やせているところも多く、そこだけを耕しても、その土地の村びとたちは食うに困ったからである。しかし、悪条件の水田耕作地に慣れた彼らの農作業は、概して丁寧だったので、ングトゥル郡出身の水田持ちの人びとは、彼らを農業労働者として自分のところで雇うようになった。1950年代にはすでに、数多くのウォノギリ県東部出身者がングトゥル郡に入ってきて、水田耕起（荒起し、耕耘、田ならし）の作業などに従事した。田植えや稲刈りをする女性農業労働者もいた。農業労働者たちは、やがて出かせぎモノ売りであるングトゥル郡出身者との間に分益制を敷いて、ングトゥル郡出身者の子分として、インドネシア各地に散らばる出かせぎ先へと誘われていくようになった [2007年6月11日、中ジャワ州スコハルジョ県ングトゥル郡にて、かつてアイスクリーム売りとして南カリマンタン州バンジャルマシムと南スラウェシ州マカッサルへ出かせぎに行っていたジャラルさん（同郡の出身、男性、60歳代）への聞き取り]。

すなわち、ウォノギリ県東部棚田地方の出身者の農作業にたいする辛抱強さと丁寧さは、他地域の人びとの関心と呼び、初めは農業労働者としてスコハルジョ県ングトゥル郡周辺へ誘われ、のちにインドネシア全土に散らばるモノ売りとしての出かせぎにも誘われる形で、新しい経済機会の獲得につながっていく。現在、スコハルジョ県ングトゥル郡に農業労働に出かけるウォノギリ県東部棚田地方の出身者はほとんどいなくなり^(註19)、多くはインドネシア各地に向かってモノ売りとしての出かせぎをおこなって生計を立てている。

精魂込めて切り拓いた土地に執着するウォノギリ県東部棚田地帯の人びとは、村と出かせぎ先とを往復する暮らしを途切れることなく続ける。スコハルジョ県ングトゥル郡の人びとの圧倒的多数も、出かせぎモノ売りを引退すると、出身村に戻る。このような循環型移動（一時的移動）を、彼らソロ出かせぎ送り出し圏のことでポロ (mboro)^(註20) という。出かせぎで得た収入によって出身村に土地と家を新しく購入したい、と同圏出身者はつねに願っている。どんなに遠くで長期間出かせぎを続けていても、自分の人生を出身村と切り離す気はない。

ソロ地方の出身者の多く、とりわけスコハルジョ県とウォノギリ県の出身者は、食いぶちを探しにどこへでも出かけていくが、自分が帰るべき場所は、ソロ地方の出身村であるという思いを生涯持ちつづける [2003年8月12日、東ジャワ州ルマジャン県にて、緑豆ぜんざい売りのスカルディさん（中ジャワ州スコハルジョ県ングトゥル郡の出身、男性、70歳代）への聞き取り]。

2. 中ジャワ州ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村の農業経済

A村へは、棚田を両脇に眺めながら、ジャティプルノ郡の郡役場から北東に約7キロ、起伏の激しい小道をバイクで20分ほど走る。ここに行く定期乗り合いバスはない。A村の総面積は、257.1ヘクタール（ジャティプルノ郡の総面積の4.6パーセント）である。うち、水田が59.9ヘクタール（A村の総面積の23.3パーセント）、畑地が77.4ヘクタール（同30.1パーセント）、宅地が107.8ヘクタール（同41.9パーセント）。

ント)を占めている。村は4つの集落(M集落、N集落、S集落、M'集落)から構成され、4集落はさらに6町内会14隣組に細分される。2001年度の村の総人口は、2599人(男性1203人、女性1396人)であり、人口密度は1平方キロメートル当たり1010.9人であった。村全体には465世帯あり、1世帯は平均5.6人である。15歳以上60歳未満の生産労働人口は1439人で、村の総人口の55.4パーセントに当たる。村役人は、村長と書記をふくむ7人と各集落長4人の、合計11人である。彼らには、給与の代わりに、村でもっとも農業に適した場所に職田が与えられている。A村には、公務員12人、教員24人、公務員・軍人を退職した年金受給者8人がいる。そのほか、農業とごくわずかな小ビジネス^(註21)をのぞけば、とくに村での就業機会があるわけではない。

村の農業人口は、413人(村の総人口の15.9パーセント)である。なかでも村に腰を据えて農業を営む世帯の主力には、生産労働人口からはみでた60歳以上の人びとが多い。生産労働人口のなかには、季節的に稲作にかかわる人びとがふくまれているが、彼らの主たる生業は農業ではない。村の農業人口のうち、水田持ちあるいは借地で稲作をおこなっている人が178人(村の農業人口の43.1パーセント)、水田なしの農業労働者が235人(同56.9パーセント)いる。水田持ちであっても、平均的には0.25~0.30ヘクタールの広さほどしか所有していない。こうした零細経営規模は、王侯領時代におけるこの地方の土地分割史に由来する^(註22)。この地方で両親の財産(家屋敷や水田など)を相続するのは、一般的にいちばん年少の娘である。そしてその跡取り娘が両親の最期を看取る。あるいは

はいちばん年少の娘でなくても、両親を看取る子どもが親の財産を相続する。水田持ちの世帯であっても、その水田は0.30ヘクタール内外で、それ以上分割できない規模であるため、兄弟姉妹で親の水田を分割相続するケースはほとんどみられない。このようにして、同地の多くの人びとは基本的に耕作地なしの状態で放り出されるからこそ、村の農業以外のところに生計手段を見つけ出す必要がある。多くの村びとがスコハルジョ県ングトゥル郡界隈に農業労働者として出かせぎに行くことを強いられたのも、出身村に耕作地を持たなかったことに起因している。

棚田を作って細々と耕すか、バクル(bakul, 零細商人)として、コメ、ココヤシの実、カシューナッツ、丁子など地元の農産物を小規模ながら取引するか、農業労働者としてスコハルジョ県ングトゥル郡などに出かせぎに行くか、またはそれらを複合的におこなうことによって、ウォノギリ県東部棚田地帯の村びとは長く生計を立ててきた。そうしてどうにか食べつないでいだけであった地域生業史は、ングトゥル郡界隈で農業労働者になったことの「副産物」として獲得した、モノ売りとしての出かせぎ慣行によって一転した。

II ジャティプルノ郡A村での出かせぎ先・出かせぎ業種にかんする調査

1. A村からの出かせぎ者数

A村の村役場が把握している出かせぎ者の数は、M集落で104人(男性68人、女性36人)、N集落で96人(男性62人、女性34人)、S集落で78人(男性35人、女性43人)、M'集落で

95人（男性54人，女性41人）の，合計373人である。これは，村の総人口の14.4パーセント，また村の生産労働人口の25.9パーセントに当たる。村役場には，だれがいつごろからどこへ出かせぎに行っているのか，具体的な記録は残されていない。

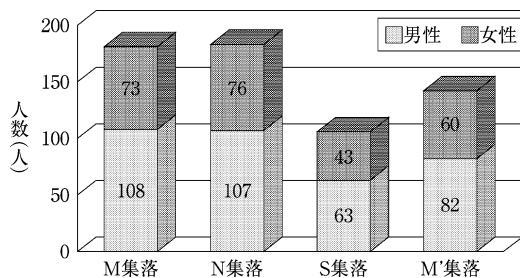
中央統計局（BPS）のウォノギリ県支部が発行した『2005年版 数字でみるウォノギリ県』のなかに，ウォノギリ県からのボロ（循環型移動）にかんする記述がある。2005年度，ウォノギリ県の総人口は112万1454人であり，うち県外，とりわけ都市部へ出かせぎに行く人は，11万3093人（ウォノギリ県の総人口の10.1パーセント）いたとされている^(註23)。また，県内でもっとも出かせぎ人口の多い，県北部に位置するセロギリ郡（kecamatan Selogiri, kabupaten Wonogiri, JATENG）では，7648人（ウォノギリ県の出かせぎ総数の6.8パーセント）が県外の都市部に流出していたとある。

A村にある14隣組を歩き，もう少し詳しい情報を集めてみた。すると，実際には，図2「A村における集落別出かせぎ者数」のとおり，M集落で86世帯181人（男性108人，女性73人），N集落で82世帯183人（男性107人，女性76人），S集落で52世帯106人（男性63人，

女性43人），M'集落で69世帯142人（男性82人，女性60人）と，合計289世帯612人が出かせぎ中であることが判明した。これは，村役場が把握している出かせぎ者総数（373人）の164.1パーセントにあたる数字である。A村全体でみると，村の全世帯数の62.2パーセントから，総人口の23.5パーセント，あるいは生産労働人口の42.5パーセントが出かせぎをおこなっている。14隣組の間で，出かせぎ世帯数のばらつきがあり，全世帯数の33.3パーセントしか出かせぎに行っていない隣組から，その89.7パーセントが出かせぎに行っている隣組まで，いろいろある。集落ごとにまとめれば，M集落の51.1パーセントの世帯，N集落の59.0パーセントの世帯，S集落の72.2パーセントの世帯，M'集落の78.4パーセントの世帯から，各世帯少なくともひとりの出かせぎ者がいた。

水田所有状況と出かせぎとの関係に触れておこなれば，水田所有率の低い隣組ほど出かせぎ世帯率が高い傾向，言い換えれば，農外所得を求めて水田非所有世帯がより多く出かせぎに行っている傾向は，少なくともA村を対象とした手持ちのデータに表れていない。今のところ，

図2 A村における集落別出かせぎ者数



（出所）筆者の聞き取りにより作成。

表1 A村の特定隣組における水田非所有率と出かせぎ世帯率

	全世帯数に占める水田非所有世帯率	同出かせぎ世帯率
M集落第4隣組	92.30%	66.70%
N集落第1隣組	73.70%	53.60%
N集落第2隣組	36.00%	64.00%
N集落第3隣組	78.90%	81.60%
N集落第4隣組	73.70%	39.50%
S集落全体	72.00-76.00%	72.40%

（出所）筆者の聞き取りにより作成。

表1「A村の特定隣組における水田非所有率と出かせぎ世帯率」にみるとおり、土地所有状況と出かせぎとの関係を、はっきりと説明することはできない。

N集落第2隣組の場合、全25世帯のうち16世帯(N集落全世帯数の64パーセント)が水田所有世帯であり、16世帯(同64パーセント)が出かせぎ世帯である。つまり、水田を所有していながら出かせぎ者を輩出する世帯が存在するにせよ、隣組長の話によると、出かせぎ者を輩出していない世帯のほとんどは、水田所有世帯である。しかし、表1でみるかぎり、水田非所有世帯率と出かせぎ世帯率に明らかな相関関係はない。おそらく、水田保有世帯であっても収穫したコメは自家消費(村落内での度重なる冠婚葬祭や共食儀礼への寄付をふくむ)すればなくなってしまうほどの規模で農業がおこなわれているA村では、貴重な現金収入稼得機会を求めて、水田保有世帯も非保有世帯も同様に、モノ売りとして出かせぎをおこなわざるを得ないという解釈が成り立つ。

前述のとおり、もともと水田なし層がスコハルジョ県ングトゥル郡周辺に農業労働者として出かけたことを契機として、A村をふくむウオ

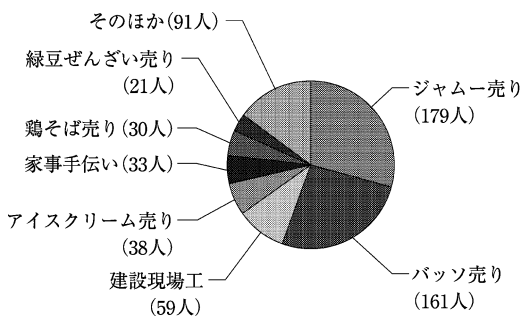
ノギリ県東部にングトゥル郡周辺の出かせぎ慣行が波及した。そしてこの慣行は、水田なし層ばかりでなく、水田持ち層にも等しく浸透している。

2. A村からの出かせぎ業種と出かせぎ先

出かせぎ業種をみると、図3「A村からの出かせぎ者数(業種別)」のとおり、612人の出かせぎ者のうち、179人(村からの出かせぎ者総数の29.2パーセント)がジャムー売り、161人(同26.3パーセント)がバツン売り、59人(同9.6パーセント)が建設現場工、38人(同6.2パーセント)が各種アイスクリーム・かき氷売り、33人が家事手伝い(同5.4パーセント)、30人(同4.9パーセント)が鶏そば売り、21人(同3.4パーセント)が緑豆ぜんざい売りなどになっている。

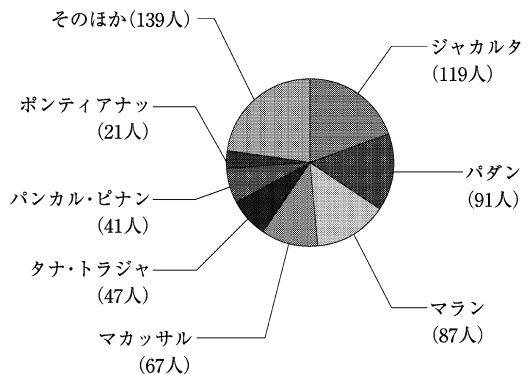
図4「A村からの出かせぎ者数(出かせぎ先別)」で出かせぎ先をみると、ジャカルタ119人(村からの出かせぎ者総数の19.4パーセント)、西スマトラ州パダン91人(同14.9パーセント)、東ジャワ州マラン87人(同14.2パーセント)、南スラウェシ州マカッサル67人(同10.9

図3 A村からの出かせぎ者数(業種別)



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

図4 A村からの出かせぎ者数(出かせぎ先別)



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

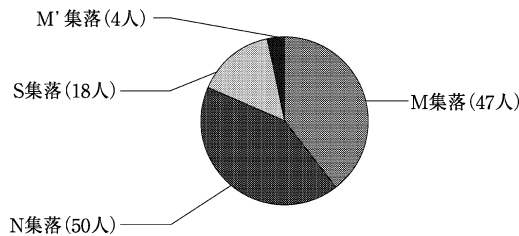
パーセント), 南スラウェシ州タナ・トラジャ 47人 (同7.7パーセント), 南スマトラ州バンカ島パンカル・ピナン 41人 (同6.7パーセント), 西カリマンタン州ポンティアナツ21人 (同3.4パーセント), 南スマトラ州ブリトゥン島 18人 (同2.9パーセント), 東ジャワ州スラバヤとブンクル州ブンクル周辺に各13人 (同2.1パーセント), 南スマトラ州バトゥラジャ10人 (同1.6パーセント) などである。たとえばパダンへ出かせぎに行っているといっても, 村からの出かせぎ者全員がパダン市に集中しているわけではなく, 多くの郡村をふくむパダン市の数十キロ圏に広く散らばっている。外国へ働きに出ているのは, 台湾に行っている女性1人 (家事手伝い) とマレーシアに行っている男性2人 (建設現場工) だけである。

もう少し詳しくみていくと, 集落ごとに出かせぎ先にたいするはっきりとした特徴があることがわかる。図5「A村からジャカルタへ出かせぎ者数 (集落別)」のとおり, ジャカルタへ出かせぎに行くのは, 主にM集落 (47人。村からジャカルタへ出かせぎに行く人の39.5パーセント) とN集落 (50人。同42.0パーセント) の人びとである。また, 図6「A村からマラン県へ出かせぎ者数 (集落別)」のとおり, マラ

ン県へ出かせぎに行くのも, 同じく主にM集落 (41人。村からマラン県へ出かせぎに行く人の47.1パーセント) とN集落 (43人。同49.4パーセント) の人びとである。この2集落からマラン県へ出かせぎに行く人は, 村からマラン県へ出かせぎに行く人の96.6パーセントを占める。

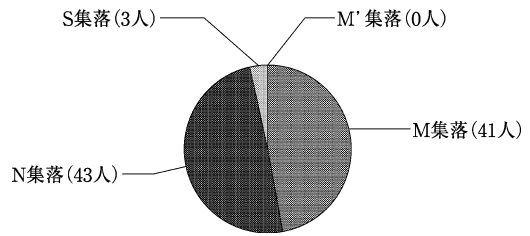
そのほか, 村からブリトゥン島へ出かせぎに行っている18人は, すべてM集落の出身であった。しかも, そのうち15人 (村からブリトゥン島へ出かせぎに行く人の83.3パーセント) が, M集落第4隣組から出ている。パンカル・ピナンへ向かう大半も, M集落の出身者 (29人。村からパンカル・ピナンへ出かせぎに行く人の70.7パーセント) であった。さらに, M集落のうち第3, 第4隣組からのみ, パンカル・ピナンへ出かせぎがあり, 第1, 第2隣組からはまったくない。第1, 第2隣組からの出かせぎは, マラン県 (M集落からマラン県へ出かせぎに行く人の68.3パーセント。村からマラン県へ出かせぎに行く人の32.2パーセント) に集中している。あるいは彼らは, ジャカルタ (M集落からジャカルタへ出かせぎに行く人の55.3パーセント。村からジャカルタへ出かせぎに行く人の21.8パーセント) に向かうことが多い。スラバヤへ出かせぎ組の筆頭は, N集落の出身者 (村からス

図5 A村からジャカルタへ出かせぎ者数 (集落別)



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

図6 A村からマラン県へ出かせぎ者数 (集落別)



(出所) 筆者の聞き取りから作成。

ラバヤへ出かせぎに行く人の84.6パーセント)である。バンドウンへ出かせぎに行くのも、同じくN集落の出身者(村からバンドウンへ出かせぎに行く人の83.3パーセント)である。バトゥラジャへ向かっている全員が、S集落の出身者である。しかもS集落第3隣組からの出かせぎ者である。マカッサルへ出かけていく大半も、S集落の出身者(村からマカッサルへ出かせぎに行く人の62.7パーセント)である。なかでも、S集落第1隣組(村からマカッサルへ出かせぎに行く人の44.8パーセント)からの出かせぎが圧倒的である。ポンティアナツへ出かけるS集落の出身者(村からポンティアナツへ出かせぎに行く人の47.6パーセント)も多い。うちS集落第3隣組から出発する人(村からポンティアナツへ出かせぎに行く人の33.3パーセント)が目立つ。アチェへ向かったS集落の出身者は、4人いる。A村からパダン、タナ・トラジャ、ポンティアナツへ出かせぎに行く人びとの多数派、あるいはボゴールとバリッパパンへ出かせぎに行く全員がM'集落の出身者である。彼らは、村からパダンへ出かせぎに行く人の47.6パーセント、村からタナ・トラジャへ出かせぎに行く人の76.6パーセント、村からポンティアナツへ出かせぎに行く人の47.6パーセントを占める。

このように、ある一時点の調査であり、県別という大まかな出かせぎ先の仕分けによるが、調査の結果が示すのは、同郷内で出かせぎ慣行が伝播し、連鎖移動が発生することである。しかも、隣組などかなり狭いグループで、出かせぎ先が固まっていたり、隣り合わせに住む親族同士が誘い合っ出て出かせぎに行ったりする状況が、確かに表れている。

3. A村から東ジャワ州マラン県への出かせぎ

上でみてきたとおり、親族あるいは隣組など、ごく親しい関係の出かせぎネットワークが機能しているために、村びとたちにとって地縁・血縁が基盤となり、村落制度がそのまま出かせぎ先に持ち込まれる印象が、自然に通用している。そして「都市のなかのムラ」ができるという文脈で、出かせぎは語られてきた。果たしてそうであろうか。ここでは、特定集落や特定隣組からの出かせぎをもう少し詳しく分析する。

A村全体で、マラン県へ出かせぎに行く人は87人いて、それは村から全国に送り出される出かせぎ者総数のうちの14.2パーセントを占める。表2「A村各集落からのマラン県各郡への出かせぎ者数」にみるとおり、マラン県へ向かう人には、M集落(41人。村からマラン県へ出かせぎに行く人の47.1パーセント)とN集落

表2 A村各集落からのマラン県各郡への出かせぎ者数(人)

	M集落	N集落	S集落	M'集落
スンプルプチュン	1	0	0	0
クバンジェン	0	5	0	0
パキサジ	11	2	0	0
クボンアゲン	0	2	0	0
トゥレン	4	10	0	0
ブルラワン	0	2	1	0
パキス	4	10	0	0
トゥンパン	2	2	2	0
シンゴサリ	15	2	0	0
ラワン	4	2	0	0
ブヌル(マラン市内)	0	4	0	0
ノンコジャジャル	0	2	0	0
合計	41	43	3	0

(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

(注) 厳密には、ノンコジャジャルは、マラン県に隣接するパスルアン県に属する郡である。

(43人、同49.4パーセント)の出身者がとくに多い。この2集落からマラン県へ向かう人は、村からマラン県へ出かせぎに行く人の96.6パーセントを占めると、先にも述べた。しかし、彼らがみな一斉にマラン県の一カ所を目指しているわけではない。

M集落第1, 第2隣組の人びとはマラン県のシンゴサリ郡へ、あるいはM集落第2隣組の人びとは、第3, 第4隣組の人びととともに、マラン県のパキサジ郡へ出かせぎに行く。N集落第2, 第3隣組の人びとは、マラン県パキス郡へ出かせぎに行く。あるいは、マラン県のトゥレン郡に向かう。クパンジェン郡にいるのも、彼らである。ラワン郡にいるのは、M集落第3隣組とN集落第1隣組の人びとである。すなわち、同村出身者といっても、夫婦あるいは兄弟姉妹くらいの小さなグループ(2, 3人から10人程度の規模)として、郡レベルで商売上の縄張りを作りながら出かせぎをする。

このような事実から、ごく小さな集団内で連鎖移動が起こると判断できないこともないが、特定出身村から同じマラン県へ出かせぎに行く場合にせよ、当該村の人びとは、狭い一カ所に集まって商売をするのではなく、互いに競争を激化させないように、マラン県全体を広く郡・村にまで広範囲に散らばっているとみるのが妥当かと思われる。マラン県の特定の場所へ出かせぎに行っているA村出身者のなかに、県内の別の場所で商売をする親族がいるという人はかなり多い。お互いの集団の商売域をできるかぎり脅かさないために、同郷者で集住しない、もしくは狭い商売範囲で固まって商売をしない工夫も、各出かせぎ先でおこなわれてきた。このように、県別を郡別に代え、より詳しい出かせぎ

先の仕分けにもとづいた調査によって、「都市のなかのムラ」の形成へと自動的につながっていく単純な連鎖移動性が薄まり、人びとがおこなっている出かせぎ先の選択が、より経済合理性を追求したもののようみえてくる。

III 出かせぎの「ポートフォリオ・セレクション」

——出かせぎ家族の家系図——

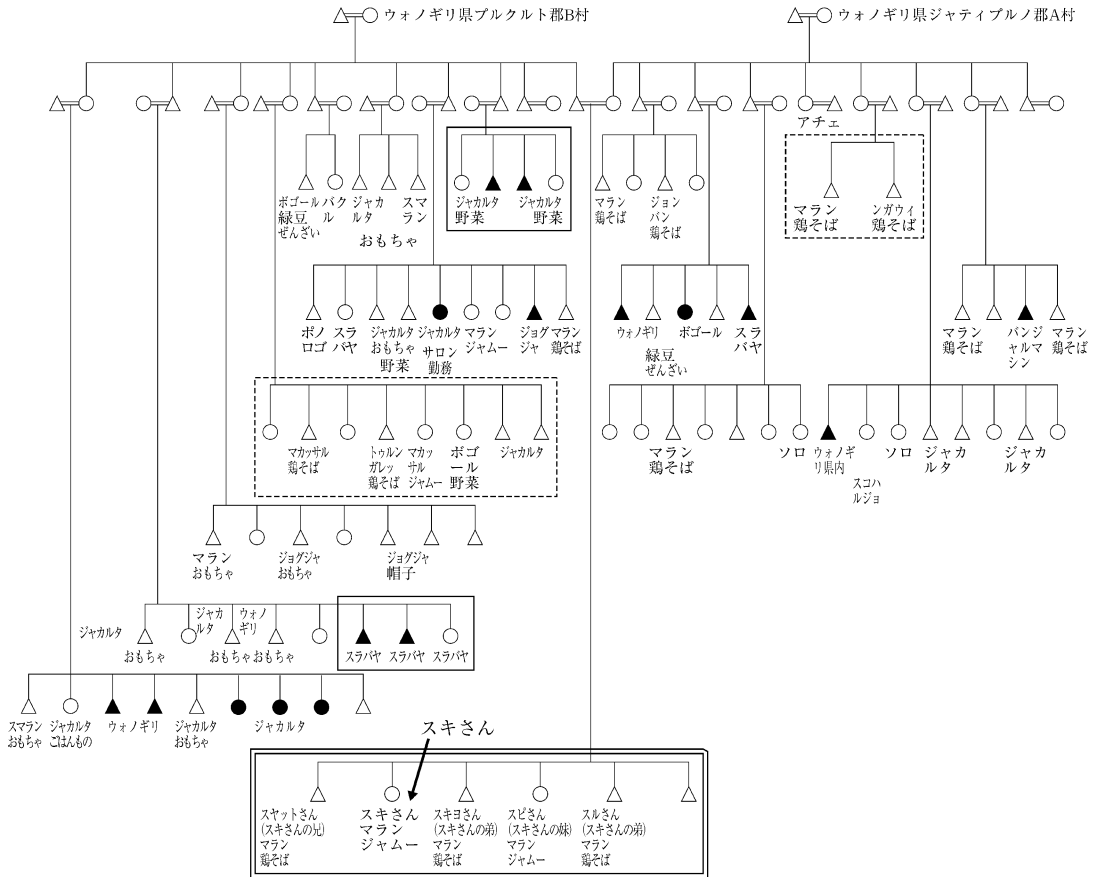
1. 出かせぎ先・出かせぎ業種にかんする選択肢

縦横に伸びる複雑な地縁・血縁が出かせぎネットワークとして存在し、それは人びとに合理的に利用されていることを、ウォノギリ県東部ジャティプルノ郡A村M集落出身のジャムー売りスキさんの家系図^(註24)を使って、さらに確認する。スキさんは、東ジャワ州マラン県シンゴサリ郡へ出かせぎ中である。

図7「スキさん一家の家系図」は、スキさんの親、兄弟姉妹、伯父母、叔父母、いとこの4親等における出かせぎ先と出かせぎ業種を提示している。血縁は、情報量の豊富さや気軽さの点で、家族成員のひとりひとりがもっとも安心して利用できる、出かせぎネットワークである。各人の配偶者から伸びる姻戚関係を添加して、より広範で有効なネットワークを追記すべきところだが、図の煩雑化を避けるために、ここではあえて省略してある。血縁のほか、村びとたちはさまざまな隣人・知人のネットワーク(地縁)を持っている。

スキさん家族の4親等家系図に表れる出かせぎ先は、スマトラ島の北西端ナングロ・アチェ・ダルサラム州バンダ・アチェから南スラ

図7 スキさん一家の家系図



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

(注) ○は女性，△は男性，＝は婚姻関係を示す。

性別記号の下に地名があれば、出かせぎ先を示す。さらにその下に説明がある場合、モノ売りとしての何を商っているかを示す。性別記号の黒い塗りつぶしは、出かせぎ業種が建設現場労働者や工場労働者であり、モノ売りでないことを示す。

ウェシ州マカッサルをふくむ 16 カ所を数える。図に登場する 126 人のうち、67 人が現在出かせぎ中である。同じ両親から生まれた兄弟姉妹で、同じ出かせぎ先を目指す場合がよくみられるのは、連鎖移動の例 (図 7・家系図中の実線の囲みが一例) である。しかし同時に、兄弟姉妹であっても、しばしば出かせぎ先や出かせぎ業種がばらばらであるようす (図 7・家系図中の点線の囲みが一例) も、同じ家系図中にうか

がえる。この家系図に表れているだけで、全国 16 カ所に出かせぎ先の候補があるために、たとえばもし実兄がいる首都ジャカルタへ行って商売がうまくいかなかった場合、今度は母方のいとこがいる東ジャワ州マラン県で商売を試みるような事例が頻繁に生じる。

さらに聞き取りを進めていくと、これまでに少なくとも一度は出かせぎ先を変えたことのある人が大多数であった。とくに男性は、出かせ

ぎ先に応じて出かせぎ業種も変更する傾向が強い。夫婦で別々の出かせぎ先に向かう世帯もあれば、夫は村に残り、妻だけが出かせぎに行く世帯もある。地縁・血縁だけに頼るとしても、ある村びとにとって、出かせぎ先にたいする選択肢はつねに多数存在する。そのため、ほとんどの村びとは、何度も出かせぎ先を変えていて、ある時点で「たまたま」、ある親族や隣人と同じところにたどり着いているとみる視点が重要になる。

ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村をふくむソロ出かせぎ送り出し圏の出身者にたいして筆者がおこなった1011件の聞き取りのうち、「これまで何回出かせぎ先を変えてきたか」という質問にたいして482件の回答が寄せられた。そのうち、出かせぎ先を変えたことがあると答えた人は366人(回答数の75.9パーセント)で、一度も変えたことのないと答えた人116人(同24.1パーセント)より圧倒的に多い。出かせぎ先を1回だけ変えたことのある人が93人(同19.3パーセント)、いっばうで複数回変えている人が273人(同56.6パーセント)もいた。そのうち、5回以上変えている人が41人(同8.5パーセント)もふくまれている。

「自分が現在出かせぎ中の(あるいは引退前に出かせぎに行っていた)場所以外に、近い関係の家族成員が出かせぎ中の場所はあるか」という質問にたいしては、303件の回答を得た。うち、「ない」と答えた人は7人(回答数の2.3パーセント)にとどまり、大多数の296人(同97.7パーセント)が「ある」と答えている。ここで「ある」と答えた人のうち、95人(同31.4パーセント)は、複数の場所を挙げている。要するに、地縁・血縁だけに依存して自分の将

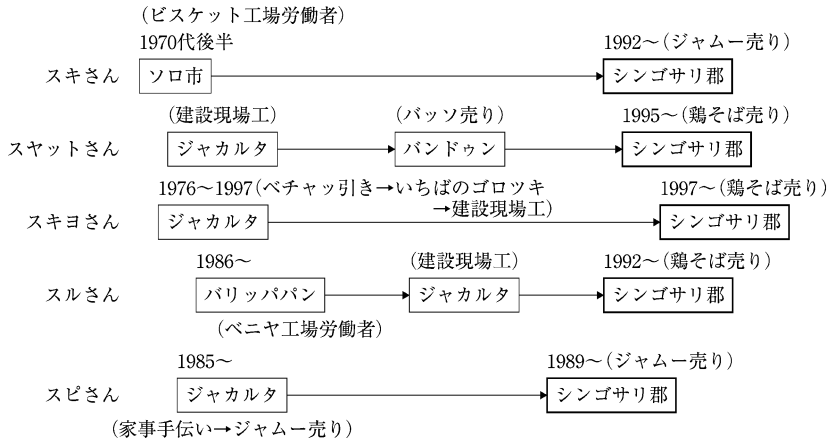
来の出かせぎ先を選ぶにしても、その候補地は複数カ所あるというソロ出かせぎ送り出し圏出身者が多い。そのため、ある人が実姉のいるインドネシア第2の大都市スラバヤへジャムー売りとして出かせぎに行っても、たとえばそこで商売がうまくいかない場合、今度は義兄がバツソの商売をしている西ヌサ・トゥンガラ州ロンボック島マタラムへ渡って、もう一度ジャムー売りとして再出発してみるというような事態が、日常茶飯である。

ここでもう一步踏み込んで考えてみる。ジャムー売りスキさんの兄弟姉妹には、4親等内に出かせぎ先の選択肢が16カ所ある。にもかかわらず、現在、兄弟姉妹5人みなが同じマラン県シングサリ郡へ出かせぎに行っている状況(図7・家系図中の実線の二重囲み)を、どうとらえるべきか、それは単純な連鎖移動であるのかどうかについて考察を加える。

図8「スキさん兄弟姉妹が東ジャワ州マラン県シングサリ郡にたどり着くまで」のとおり、兄弟姉妹5人がシングサリ郡入りをしている時期はバラバラである。現在、兄弟姉妹全員がシングサリ郡で商売をしているが、それ以前は、先の説明のとおり、縦横に広がる濃密な地縁・血縁を使って、それぞれが別々の場所で商売をしていた。以前スキさん以外の兄弟姉妹はジャカルタ市へ出かせぎに行っていたが、同じ場所にいたわけではない^(註25)。ジャカルタ市入りをする時期も、その際に頼った親族・知人やそのほか情報源も、みな異なっていた。

図7の家系図では、彼らのおこなってきた出かせぎは一見典型的な連鎖移動であるように映るものの、図8で詳細を確認すると、彼らの出かせぎにはただの連鎖移動とはみなしがたい要

図8 スキさん兄弟姉妹が東ジャワ州マラン県シンゴサリ郡にたどり着くまで



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

素もふくまれていることがわかってくる。つまり、兄弟姉妹がいるからという消極的な理由だけで、全員がいっしょにシンゴサリ郡入りを果たしたわけではなく、それぞれの都合により、それぞれがほかに比べてシンゴサリ郡での商売に利点があると感じた時点で、シンゴサリ郡への出かせぎに踏み切ったとみることができる。兄弟姉妹から得た同郡の商売的魅力にたいする情報が、各人をそこに呼び寄せた最大の理由になっている点で、血縁の役割は重要である。しかし同時に、今後遅かれ早かれ、別の地縁・血縁から得た別の情報にもとづいて、シンゴサリ郡よりもっと魅力的な出かせぎ先を見つけて、新しい場所へ移動していく兄弟姉妹が出てくる可能性も大いにある。このようなケースが、ソロ出かせぎ送り出し圏出身の出かせぎモノ売りのなかで、ごく一般的な出かせぎ先の決定様式である。

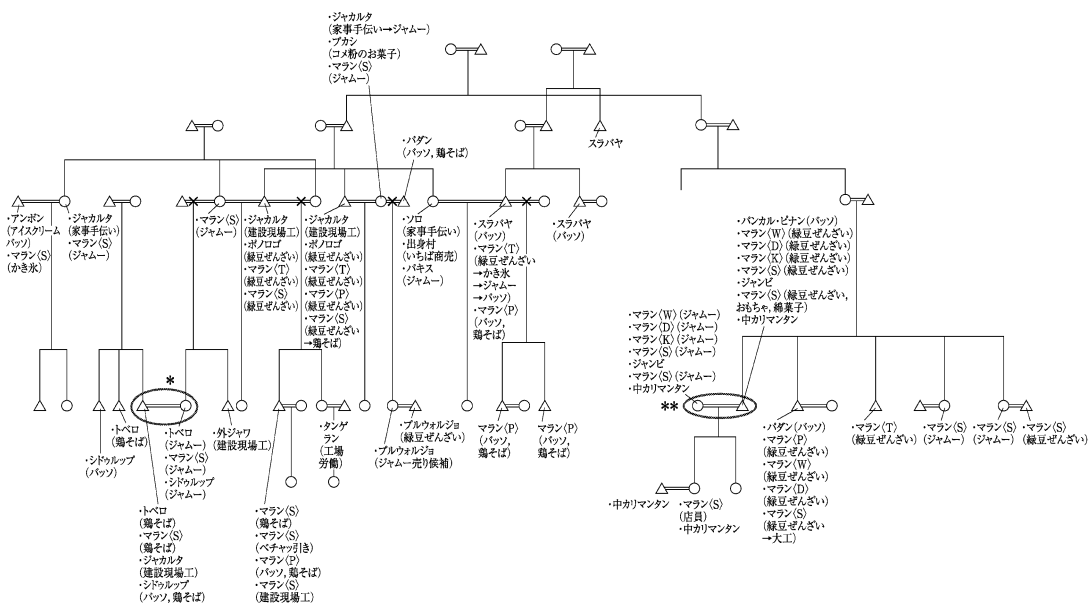
もうひとつ、同じくA村出身者の家系図を見ておく。図9「マラン県を中心に出かせぎを展開中の、あるA村出身者一家の家系図」でも、

現在マラン県シンゴサリ郡に出かせぎ中の人が目につくが、やはり全員が一斉にシンゴサリ郡へやってきたわけではない。シンゴサリ郡入りをするまでに、各人がさまざまな場所で、さまざまな業種による出かせぎを経験している。マラン県内へ出かせぎに行っているといっても、頻繁に行き来が可能な狭い地域に集まっているのではなく、広く県内全域を視野に入れて、各人が思い思いに出かせぎ先を決定している。

* つきの楕円でマーキングした(図の左側)夫婦に目をやると、彼らが血縁を最大限に利用して、出かせぎ先をあちこち渡り歩いているようすがわかる。彼らは、特定の出かせぎ先で儲けることができるかできないかを指針に、もともと商売利益の上がる出かせぎ先をつねに探し求めている。血縁筋から得たある特定の出かせぎ先を唯一のものとし、利益が上がろうと上がるまいとそこに依拠するのでなく、血縁を積極的、かつ戦略的に利用しようとする姿勢が強い。

** つきの楕円でマーキングした(図の右

図9 マラン県を中心に出かせぎを展開中の、あるA村出身者一家の家系図



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

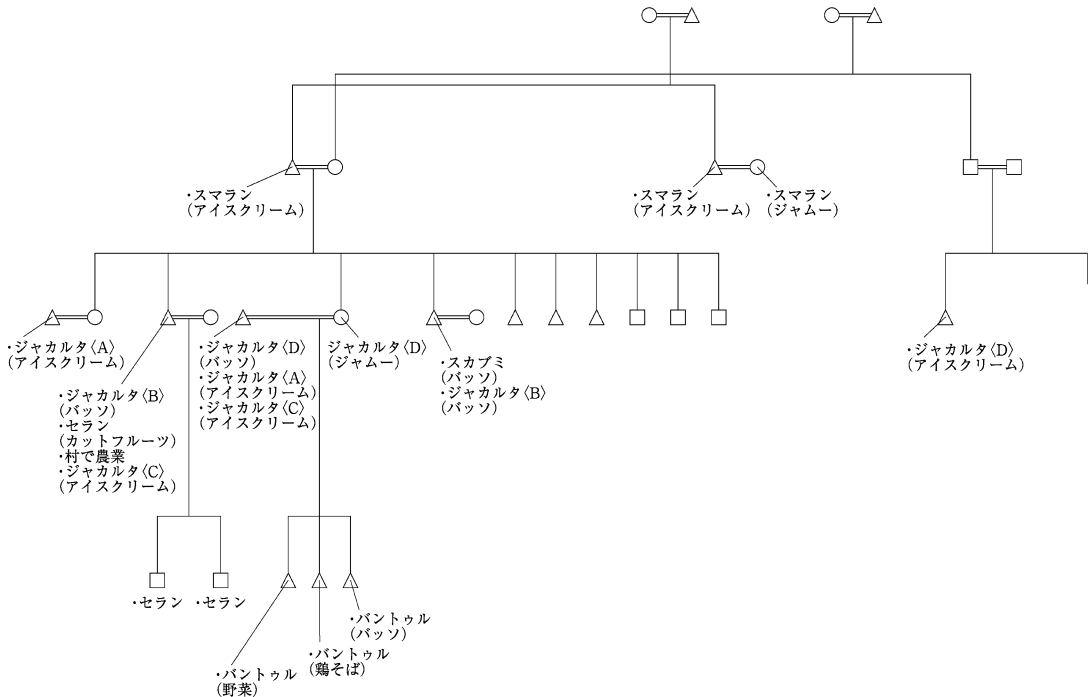
- (注) (1) ○は女性，△は男性，＝は婚姻関係，×は離婚・死別を示す。性別記号の下の地名は出かせぎ先，()は出かせぎ業種/販売物を示す。出かせぎ先や出かせぎ業種(販売物)が複数記されている場合，年代が古い順に上から並べた。
- (2) 出かせぎ先は，原則，県(市)別に示す。
- (3) 出かせぎ先がマラン県の場合，マラン<D>；マラン県ダンビット郡，マラン<K>；マラン県クバンジェン郡，マラン県<P>；マラン県パキス郡，マラン<S>；マラン県シンゴサリ郡，マラン<T>；マラン県トゥンパン郡，マラン<W>；マラン県ワジャック郡と，郡名まで示す。

側) 夫婦に視点を移す。彼らは，マラン県シンゴサリ郡でほかの家族成員たちといっしょに出かせぎをおこなっていた時期(約15年間)があるとはいえ，現在，マラン県や出身村のあるジャワ島を離れ，遠くカリマンタン島にいる。彼らは，血縁メンバーといっしょに過ごすことができるという理由をよりどころとする出かせぎ先の選択に縛られないで，ジャワ島よりも商売相手が少ないうえ，買い手の高い購買力を期待できるジャワ島外への出かせぎを簡単に決断した。シンゴサリ郡入りをする以前にも，スマトラ島(南スマトラ州パンカル・ピナンとジャンビ州)への出かせぎ経験があるこの夫婦は，

ジャワ島外での商売的旨みをすでによく知っていて，新しい出かせぎ先の選択にほとんど迷うことはなかった。

以上，①地縁・血縁を使うだけにしても，出かせぎ先や出かせぎ業種にかんする選択肢の幅がかなり広いこと，②各人の出かせぎ史を詳しく紐解くと，ある人がだれかと申し合わせて特定の出かせぎ先にやってきたとばかりは言えないし，むしろその人が各地を渡り歩いてきたあと，特定の時点において「偶然」，ほかの家族成員と同じ場所にいるとみられること，③ほかの家族成員と同じ県へ出かせぎに行く場合でも，狭い一カ所に集住したり，集まって商売をした

図10 ハディさん一家の家系図



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

(注) (1) ○は女性, △は男性, □は性別不明, =は婚姻関係を示す。性別記号の下の地名は出かせぎ先, ()は出かせぎ業種/販売物を示す。出かせぎ先や出かせぎ業種が複数記されている場合, 年代が古い順に上から並べた。

(2) 出かせぎ先は, 原則, 県(市)別を示す。

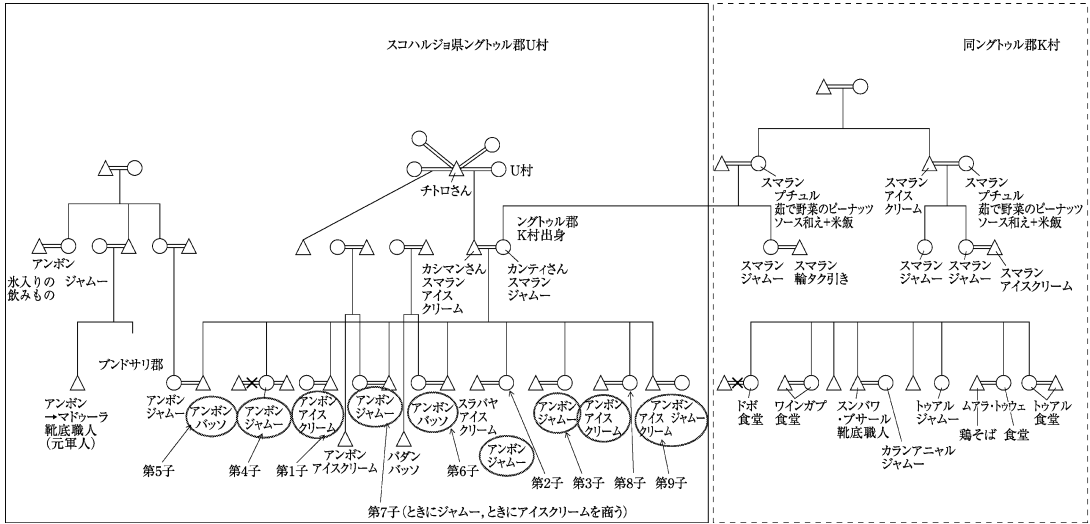
出かせぎ先がジャカルタの場合, より詳細に, ジャカルタ〈A〉; ジャカルタ市A地区, ジャカルタ〈B〉; ジャカルタ市B地区, ジャカルタ〈C〉; ジャカルタ市C地区, ジャカルタ〈D〉; ジャカルタ市D地区と分類した。

りしているわけでは必ずしもないこと, ④地縁・血縁は, 経済的な成功を収める目的で, かなり戦略的に使われていること, ⑤見込み所得の大きさをつねに最重視しながら, 各人が出かせぎをおこなっていることなどが, 聞き取りからわかってきた。これらはウォノギリ県ジャティプルノ郡A村だけに顕著な性質ではなく, 広くソロ出かせぎ送り出し圏内にごく一般的に見られる性質である。

以下に例示するスコハルジョ県タワンサリ郡B村出身の, ある家族の家系図(図10「ハ

ディさん一家の家系図)においても, 同様の指摘が可能である(2005年4~5月[約1カ月]のジャカルタ調査を中心に分析)。家族成員がともに同じジャカルタ市で出かせぎ中の場合でも, 実際にはジャカルタ市の南北に分かれ, それぞれ出かせぎ活動をおこなってきた。ジャカルタ市内で商売・居住場所を変えているのも, それぞれに儲かる場所を探してきた結果である。詳細な聞き取りがおこなわれないうえ, 一家がある一時点において, ジャカルタの一カ所へ一斉に流れ込み, 出かせぎ経済活動をおこなって

図 11 チトロさん一家の家系図



(出所) 筆者の聞き取りにより作成。

(注) ○は女性, △は男性, =は婚姻関係, ×は離婚・死別を示す。性別記号の下の地名は、出かせぎ先, さらにその下は出かせぎ業種/販売物を示す。

いるような印象が生まれ、地縁・血縁に強く依存した都市インヴォリューション的な出かせぎ様式がイメージされてしまう懸念が、この家系図に見え隠れる。

また、ハディさん一家の家系図には、親世代と子世代、さらに孫世代へと世代交代が進むなかで、出かせぎ先や出かせぎ業種の世襲が必ずしも起こらないことが表れている。それらの選択は、時代によってずいぶん違っている。すなわち、ある人の出かせぎ先や出かせぎ業種は、開発やそれともなう社会経済生活の変化など、時代の流れに応じて、フレキシブルに選択される。ある時点で出かせぎを開始しようとする人は、もっとも高所得を期待できる出かせぎ先と出かせぎ業種をつねに模索しているわけである。

今度は、図 11「チトロさん一家の家系図」を使って、モノ売りとして出かせぎをおこなう人びとの出かせぎ先や出かせぎ業種の決定プロ

セスを、さらに詳しく説明する(2007年3月[約1週間]のマルク州アンボン島調査を中心に分析)。この一家は、スコハルジョ県ングトゥル郡U村の出身者と結婚して、同村の有力者となったチトロさんを基点にする。図の左側部分(図 11・家系図中の実線の囲み)に目をやると、チトロさんの息子カシマンさんとその妻カンティさんとの間に生まれた9人の子どもは、現在9人ともがマルク州アンボン島へ出かせぎにきている。

最初にアンボン島入りをしたのは、同郷U村出身の夫に従って、1970年からアンボン島でジャムを売っている第4子である。その夫とはすでに離婚しているが、彼女は同地での商売を続けている。次に1971年、第4子に誘われる形で、第5子がアンボン島にやってきた。第5子の妻は、ングトゥル郡に北で接するブンドサリ郡の出身で、1968年ごろには、同郷の叔

母に誘われてアンボン島にやってきて、ジャムー売りをしていた。つまり、彼女は、夫（第5子）よりも先にアンボン島に入っている。その叔母は、軍人の甥といっしょにアンボン島入りを果たした。しばらくすると、彼は軍人を辞め、アンボン島で靴底職人になり、その後、東ジャワ州スラバヤの北東に位置するマドゥーラ島へ移って、現在まで靴底職人をしている。この第4子あるいは第5子に誘われる形で、カシマンさん・カンティさんを父母にもつ9人の兄弟姉妹はみな、中ジャワ州の出身地からバスと船を乗り継いで数日かかるアンボン島まで、続々と出かせぎにやってきた。すでにアンボン島での商売を軌道に乗せた現在、兄弟姉妹たちは、帰郷に際して飛行機を利用することが多い。

第6子は、アンボン市内で1、2の勢力を誇る、バツソ・鶏そば売りの親方になっている。すでに30人も子分がいるが、それでもまだ飽き足らずに、故郷の中ジャワ州スコハルジョ県ングトゥル郡より北に位置するポロカルト郡や東に位置するカラニアニャル県ジャティプロ郡などで、つねに新しい労働力をスカウトして、アンボン市内に連れてきては、親方業を拡大している。ポロカルト郡は、彼の妻の出身地でもある。第6子と妻は、アンボン島で知り合った。妻は、結婚前から兄といっしょにングトゥル郡K村出身の親方に連れられてアンボン島に入り、長くジャムー売りをしてきたが、今はそれを辞めて、夫（第6子）のバツソ・鶏そばの商売を経理担当係として支えている。兄弟姉妹のうち、第5子と第6子をふくむ5人は、出かせぎ先のアンボン島で出会った同郷周辺の出身者のなかから、それぞれ配偶者を見つけている。

兄弟姉妹のうち、アンボン島でしか出かせぎ

の経験がないのは、第8子と第9子だけである。第1子は、ジャカルタでたばこ売り、スマトラ島ランブン州カリアンダでジャワ風汁そば・焼きそば売り、東ジャワ州マドゥーラ島スムヌップでバツソ売りを経験したのち、アンボン島でアイスクリーム売りになった。第2子と第3子の女性は、父母（カシマンさん・カンティさん）がかつて出かせぎに行っていた、中ジャワ州都スマランでジャムー売りをしていたことがある。

第5子は、中学1年生だった1971年、「アンボン島へ出かせぎに行けば、自転車を買える」と、先に出かせぎを始めていた姉（第4子）や同郷の知人から聞いて、単身でアンボン島のアンボン市内に乗り込んだ。まず、市場のとうがらし売りをやってみて、それから繁華街で緑豆ぜんざい売りになった。しかし商売は簡単にはうまくいかず、失意のうちに帰郷する。その後、東ジャワ州のチュプ、ブローラ、ボジョヌゴロ、トゥバン、トゥルンアグン、マディウン、パチタン、中ジャワ州のドゥマツ、プルウォダディ、スマトラ島ランブン州タンジュンカランの各地を渡り歩いて、アイスクリームの商売をしてきた。最終的には1979年、アンボン市X地区に落ち着き、アイスクリーム売りから商売替えをして、現在に至るまでバツソと鶏そばを商っている。すでにX地区からY地区に移り、そこに借家ではなく、自分の家を持つまでになった。

現在はバツソ・鶏そば売りの親方になっている第6子の場合、1974年、姉（第4子）を頼ってアンボン島にやってきたものの、なにか性に合わない気がして、6カ月で島を出た。それから東ジャワ州マドゥーラ島スムヌップに移って、バツソやナシ・ブルン（nasi burung, うずらのローストと米飯）を売ってみる。スムヌップで

商売をする同郷周辺の出身者のなかに、ナシ・ブルン売りは多かったと言う。しかし、第6子は、ここでもたった6カ月間しか持ちこたえられなかった。その後も、ジャワ島各地を渡り歩いたり、村でぶらぶらしたり、将来はなかなか定まらない。1986年、ある親族を頼って、東ジャワ州パチタンへ出かけてみたあとで、彼はようやくアンボン島に腰を据える決意を固めた。

まとめると、兄弟姉妹各人がさまざまな思惑で、さまざまな出かせぎ経験をしたうえで、最終的にアンボン島への出かせぎに行きついている。各人の出かせぎ経験を細かく追っていくなかで、単純な連鎖移動で全員がアンボン島に集まっているのではないことがはっきりした。中ジャワ州都スマランで1杯500~1000ルピア^(註26)程度のジャムーが、アンボン島では1500ルピアであろうと、2000ルピアであろうとどんどんさばける。マドゥーラ島スヌムップで5000ルピアのバツソが、アンボン島では1万ルピアで飛ぶように売れる。原料費はジャワ島でよりずっと高くても、アンボン島ではそれを楽に帳消しにできるほどの儲けがある。それゆえ、みなアンボン島に居つく。アンボン島と出身村を数カ月に一度往復できるほど、アンボン島のモノ売りはかせぐ。兄弟姉妹がいることだけを理由に、アンボン島への出かせぎを決めたわけではない。

さらに言うならば、カシマンさん・カンティさんから生まれた9人の子どものうち、Y地区などアンボン市内に居を構えて商売をしているのは、第5子と第6子だけである。同地区は、ジャワ島からやってきた約300人のモノ売りを抱える、出かせぎ者の集落である。そのほかの兄弟姉妹7人は、それぞれジュシラ、ヒトゥ、

ガルングン、タナ・ラクなど、アンボン市内を遠く離れた場所で、モノ売りとして活躍している。アンボン島から船でセラム島の中マソヒに渡って、商売場所を見つけようとしたのは、第7子である。彼は、「僻地に行けば行くほど、アイスクリームは売れる。列を作って順番待ちをする子どもたちのために、手を休める暇なく、アイスクリームをカップに入れる作業をしていると、あっという間に売り切れた」と、目を輝かせて話す。兄弟姉妹がみなアンボン島にいるとはいえ、全員が一カ所に集まって商いをしたり、居住したりしているわけではない。彼らは、各人にとっていちばん商売繁盛を期待できる場所に散らばっている。

チトロさんを発端とする家系図のうち、今度は、ングトゥル郡K村に連なるグループ(図11・家系図の右側部分。点線の囲み)に目を移す。聞き取りによれば、このグループにも、出かせぎを開始したばかりのころは、アンボン島にいたという人が多い。しかし彼らは、カシマンさん・カンティさん夫婦から生まれた9人の子どもたちなど親族がたくさんいるにもかかわらず、アンボン島に居つくことなく、同島を飛び石に、西ヌサ・トゥンガラ州スンバワ島スンバワ・ブサール、東ヌサ・トゥンガラ州フローレス島ワインガプ、マルク州カイ諸島トゥアル、アル諸島ドボなどの新天地を目指した。かつてタンニバル諸島サウムラキに行ってジャムー売りになった人もいる。最終的には、中カリマンタン州ムアラ・トゥウェに落ち着いた人もいる。

出かせぎ先や出かせぎ業種を決定するうえで、血縁・地縁が大切な役割を果たすのは間違いない。しかし、モノ売りとしての出かせぎを志す人びとは、それにばかり依存するわけではない。

出かせぎのある一時点におけるデータだけをとって分析すると、「同郷内で出かせぎ慣行が伝播し、連鎖移動が発生する」という事実が強調されすぎるきらいがある。聞き取りを繰り返して、簡単には表出してこない、ひとりひとりの出かせぎ史を徹底的に取り上げなければ、出かせぎモノ売りの実態はつかみにくい。出かせぎに行く人は、たくさん出かせぎ先や出かせぎ業種の候補のなかから、時と場合に応じて、もっとも自分の効用を満たしてくれそうな選択をすればよいし、実際にそうしている点にもう少し注目されるのが適切である。出かせぎ様式の決定は、きわめて「ポートフォリオ・セクション的に」おこなわれている。

2. 全国に広がる出かせぎ先

ソロ出かせぎ送り出し圏の出身者は、大都市へばかり出かせぎに向かうのではない。ジャワ島のジャカルタやバンドゥンなど、あるいはバリ島のデンパサール、スマトラ島のメダン、スラウェシ島のマカッサルなど大都市においては、オランダ植民地時代から出かせぎ経済活動に従事してきた圏内出かせぎ先発組（たとえば、スコハルジョ県ングトゥル郡の出身者たち）の流入で、都市の需要にたいするモノ売りの数はすでに飽和状態に達している。商売競争を避け、より多く収入を得るために、圏内出かせぎ後発組（たとえば、ウォノギリ県東部の出身者たち）は、どこかよそに出かせぎ先を探し出さなくてはならない。それゆえ、圏内出かせぎ後発組は、大都市の周縁部に位置する村落部、あるいはサバンからメラウケまで、文字どおりインドネシア全国を東西に奥地の郡村にまで散らばって、出かせぎをおこなっている。

後発組が、先発組を頼って出かせぎを開始した場合にも、両者がある大都市の一角所で長くいっしょに出かせぎ生活を送りつづけるような事態は、それほど頻繁に発生しない。例を挙げれば、ソロ出かせぎ送り出し圏の出かせぎ後発組に属するウォノギリ県東部ジャティプルノ郡A村の出身者のなかには、出かせぎ先発組が早期に入り込んだスマトラ島南部の大都市であるランブンやパレンバンへの定着を避け、そこからさらに船を乗り継いで、バンカ島やブリトゥン島に渡って、モノ売りとしての商売を始めた人がたくさんいる（前述の図4「A村からの出かせぎ者数（出かせぎ先別）」を参照）。同圏出かせぎ先発組のなかにも、さらに先発グループと後発グループが存在し、先ほど図9「チトロさん一家の家系図」をもちいて説明したとおり、後発グループは、先発グループが商売上の既得権を有する場所に長居をすることなく、さらなる僻地までを視野に入れて、自分自身の商売場所を見つけ出そうと努力してきた。このような事実も、地縁・血縁が出かせぎ先や出かせぎ業種を決定するための唯一の要素ではないし、彼らの出かせぎ様式がよりダイナミックな経済的合理性に裏づけられていることを示す。

むすび

「インフォーマル・セクター」で活動するモノ売りが論じられる場合、厳しい経済社会環境が待ち構える出かせぎ先（とくに都市部）で生き残る手段として、地縁・血縁がしばしば強調されてきた。しかしもう一步踏み込んで、その地縁・血縁の性質を調べてみると、出かせぎモノ売りにたいしてこれまでとは違った印象を抱

く。ソロ地方の特定地域，すなわちソロ出かせぎ送り出し圏からモノ売りとしての出かせぎを志す人びとの大半は，親族や知人で限られた儲けや顧客を分け合うくらいなら，もっとほかに出かせぎ先を見つけ出そうとするし，地縁・血縁を最大限に利用しながらも，そのほかの情報も駆使して，つねに自分に適した，もっともカネになる出かせぎ先や出かせぎ業種を求めている。彼らにとって，地縁・血縁の利用は，モノ売りとしての出かせぎ経済活動を遂行するための合理的戦略のひとつにすぎない。

「出かせぎ者たちは，地縁・血縁を背景に，どんどん新参者を迎え入れ，そこに貧困を分かち合う倫理が作用し，都市インヴォリューションの過程が進行する」という現象分析につながる連鎖移動を見直すことが本稿の目的であったが，ここで試みたのは，連鎖移動を一足飛びに否定する議論ではない。むしろ，連鎖移動がどのように起こっているかをできるかぎり丹念に追いかけるなかで，モノ売りとして出かせぎをおこなおうとする人びとが，何度も何度も地縁・血縁を利用しながら連鎖移動を繰り返してきた事実を積み上げることによって，従来型の連鎖移動論の枠組みに収まりきれない出かせぎモノ売りの経済ダイナミズムを抽出し，都市インヴォリューションからの脱却を図った。

インドネシアにおいて，「インフォーマル・セクター」（とくに，モノ売り業に代表される第3次産業部門）が都市インヴォリューションの枠組みで概観されてきた，と冒頭から再三述べている。この枠組みのなかで，地縁・血縁に由来する村落共生メカニズムを保持することによって，「インフォーマル・セクター」従事者たちの出かせぎ先での商売や生活が保障される

と理解されてきた。しかし，筆者がおこなってきた聞き取りからは，モノ売りとしての出かせぎをおこなう人びとにとっての地縁・血縁は，唯一無二の命綱としてというより，出かせぎ先や出かせぎ業種を選択する際，彼らの行動を円滑化したり，よりたくさんの経済的利益を得たりするための手がかりのひとつとしてみるのが適当であるとの結論が導かれる。「すでに手近にあるのだから，利用しないと損になるし，利用するのが得策である」というのが，出かせぎモノ売りにとっての地縁・血縁である。このような見方は，出かせぎをおこなう人びとを合理的個人として理解するという，ある意味，あまりに当然の姿勢ではある。しかし，これまで観察者たちはここに目をつぶったために，モノ売りの実態研究を都市インヴォリューションの枠組みに埋没させることになったように思われる。

合理的個人の公準では説明できない「社会に埋め込まれた経済」[ポランニー 1980]に包含される事象のひとつとして，地縁・血縁からなる同郷人の互酬の紐帯を良心的に重視し，都市インヴォリューションの枠組みを「無意識に」前提にすることと，経済学偏重主義で市場の完全性と合理的個人の公準をア prioriに採用することのいずれもが，結果的には出かせぎモノ売りの実態を多かれ少なかれとらえ損なってきた。実際の出かせぎモノ売りたちは，生きるための糧を見つけるという自然な欲求に身を任せて地縁・血縁を利用し，けっしてそれに縛られていない。都市インヴォリューションと離れたところで，合理的な存在として個人を眺める枠組みが，モノ売りの実態研究や「インフォーマル・セクター」研究にとって必要とされている。

なお、本稿が提示する合理的個人としてのモノ売りの枠組みは、聞き取りによって地縁・血縁のあり方を詳細に観察するところから出てきたものであり、経済学において市場の完全性とともにも公準とされる合理的個人像ではないことを強調しておく。

以上、ソロ地方出身者による出かせぎ先や出かせぎ業種の選択における地縁・血縁の役割を考察することで連鎖移動をとらえ直し、そこから都市インヴォリューション論を脱却する道を探求した。このほか、筆者の聞き取りや参与観察をとおして、出かせぎ先における同郷者同士の協業や共同活動のあり方、あるいは商売上の価格競争や顧客獲得競争のおこなわれかたなどを検討することで、同様の探求が可能であるという感触がある。

本稿では、ウォノギリ県東部の棚田地帯の人びとをモノ売りとしての出かせぎにいざなったスコハルジョ県ングトゥル郡周辺の諸事情について、ほとんど触れていない。また、ウォノギリ県東部の棚田地帯は、スコハルジョ県ングトゥル郡を中心に置き、モノ売りとしての出かせぎを発生させる地域（ソロ出かせぎ送り出し圏）の一部であり、同地帯の出かせぎ史や出かせぎ様式を説明するには、かつて農業労働者として出かせぎに行っていたことのほかにも、ングトゥル郡とのつながりが指摘される必要がある。これらにかんしては、ソロ出かせぎ送り出し圏の生成に絡めて、今後別稿を準備したい。

（注1）会社で働くのが「フォーマルな」就業機会、モノ売りをふくむ路上商売を「インフォーマルな」就業機会であるとする国際労働機関（ILO）の区分には、村井（2000, 66）に

「フォーマルが『正業』のように分類するあり方」と説明されているように、特定の価値判断が付与される懸念がある。そこで、筆者はインフォーマル・セクターという用語をカッコを付けて「インフォーマル・セクター」の形でもちいる。

（注2）倉沢（2007, 16）では「都会の中に作られた田舎」と表現され、「ロケーションは都市にあっても、故郷の生活様式、人間関係、慣習を維持した共同体」とであると説明されている。

（注3）連鎖移動はHugo（1977, 65）のことばであり、山本（1990, 20）はこれを「ある地域をとると移住はまるで鎖につながれたかのよう、同一の職業、同一の都市居住地——カンボンとインドネシアでは呼ばれる——を目指して行われることになる」と説明する。そして、「移住がこのような（引用者注—出かせぎ先駆者からの援助を当てにするという）動機と形態の下に行われる限り、インフォーマルセクター内部においてすら労働移動はきわめて乏しくなるだろう」と分析している。

（注4）ソロ市、スコハルジョ県、ウォノギリ県、カラニアニャル県、クラテン県、スラゲン県、ポヨラリ県の1市6県にからなる、旧ソロ（スラカルタ）理事州の領域を指す。

（注5）サンプル数は少ないが、ドゥイアント（2005）のなかに、こうした試みがみられる。また福家（1995, 15-16）は、商売競争の激化によって、ジャムー（天然生薬飲料）売りやパッソ（ミートボールスープ）売りの夫婦が北スラウェシ州マナドからマルク州バチャン島ラブハに移動する例を描いた。早瀬（1984, 100-101）は、出かせぎ者が出生地からジャカルタに到着するまでに何回どこを経由してきたか、ジャカルタに入る直前にどこにいたか、ジャカルタ内で住居を移動したことがあるかどうかを調査した。経路地については、西ジャワ、中ジャワ、スマトラと、かなり大まかに分類されている。

（注6）Azuma（2000）は、友人、兄弟姉妹、父親、親類など、大きな括りもちいながら、ある村びとがだれの伝手でベチャツ（becak、輪

タク) 引きになったかを調査している。Abdul Hamid and Imam Ahmad (1992) は、東ジャワ州ラモンガン県タマン村のソト (soto, 鶏やキャベツなどの具入りスープ) 売りについて、その業種による出かせぎのパイオニアまで遡る試みをおこなっている。

(注7) インドネシアにおいては、フィリピンの国際イネ研究所で開発された高収量品種の採用、化学肥料や農薬の利用促進のための政策プログラムをふくむ、稲作の農業生産集約化プログラムのことをいう。1960年代の終わりごろに始まり、70年代に本格的に展開された。

(注8) ジャワ島での例を挙げれば、中ジャワ州トゥガル県の特定期から出かせぎをおこなっているごはんもの売り (Warteg: Warung Tegal, ワルトウッグと呼ばれるトゥガル風食堂)、西ジャワ州クニンガン県の特定期から出かせぎをおこなっている緑豆ぜんざい売り、ジョグジャカルタ特別州グヌン・キドゥル県から出かせぎをおこなっている建設現場労働者、工場労働者、家事手伝い、西ジャワ州と中ジャワ州(とくに北海岸部) から出かせぎをおこなっているベチャック引きなど、数多くの「インフォーマル・セクター」従事者は、開発の時代とほぼ歩調を合わせて現れている。

(注9) ジャワ島にも、ソロ地方出身者のほか、東ジャワ州マドゥーラ島や中ジャワ州トゥガル県の特定期地方に、インドネシアの開発時代をずっと遡って出現したモノ売り集団が存在する。

(注10) 筆者がおこなってきたソロ地方出身のモノ売りにたいする聞き書きは、数字や短いキーワードに置き換えて集計すると、1011件(1011人: 男性448人, 女性563人) のデータになる。

(注11) ジャワ島、マドゥーラ島、バリ島、ロンボック島、スンバワ島、アンボン島、スラウェシ島、スマトラ島の各地で、87県(87カ所) の調査をおこなった。本稿で記述した内容にかんして、個々の具体的な調査名が挙げられる場合には、それを記した。

(注12) このような調査の间歇性は、調査の一

貫性に悪影響を与えているかもしれない。しかし、間歇的であっても、数多くの調査地を当てることによってしか得ることのできない、特定出かせぎ集団にかんする事実を重視して、本稿は組み立てられている。調査方法について、各地(とりわけ出かせぎ先) で見かけるジャムー(天然生薬飲料) 売りを筆頭に、モノ売りたちに出身地を質問してみることから、調査に着手した。インフォーマントの見つけ方は、かなり「行き当たりばったり」である。第1番目のインフォーマントの伝手で別のインフォーマントへと雪だるま式につながっていくこともあれば、雪だるま式ではなく、時間をかけて別のインフォーマントを探したこともある。もしくは、あらかじめモノ売りたちの出身村にて情報を得てから、その人に会うために出かせぎ先を訪問したこともある。したがって、実施した聞き取りのすべてが、厳密に客観的なインフォーマント選別に則していないことを、筆者も認識している。

(注13) ジャワ島で民間伝承されてきた天然生薬飲料。うこん、ばんうこん、くすりうこん、おおばんがじゅつなどショウガ科植物、こしょう科のきんまの葉、たまりんどなどを中心に、天然原料から作られる健康増進ドリンク。

(注14) 小松菜や麵入りのミートボールスープ。

(注15) 肉類をスライスしたものやビーフンなどが入った、牛肉や鶏ガラベースのスープ。一般的には、ソトと呼ばれる。

(注16) コメ粉とヤシ砂糖が主な材料の蒸し菓子。蒸し上がりにココナッツフレークを散らす。

(注17) ここをデータで証明することは、たいへん難しい。特定の出かせぎ先で商売をするモノ売りの出身地、あるいは取りあつかい商品別に分類されたモノ売りの数にかんする有効なデータは、いろいろな組織や役所を訪ねても入手できなかった。そこで、筆者自身が、インドネシア各地を歩き回るほか、実際にジョグジャカルタ特別州ジョグジャカルタ市へモノ売りとして出かせぎにやってきているソロ地方出身者の数にかんする調査をおこなって、同地方出身

者がジョグジャカルタ市のモノ売りのなかでも数が多いことを証明しようと試みた [間瀬 2008, 198-204]。また、スマラン理事州地区の(麵入り)ミートボールスープ売り協会が2007年に発表したデータによれば、「インドネシアのモノ売り総数は4330万人であり、その約4分の1が(麵入り)ミートボールスープ売りである」という。(麵入り)ミートボールスープ売りのすべてがソロ出かせぎ送り出し圏出身のモノ売りではないが、多くのソロ出かせぎ送り出し圏出身のモノ売りがふくまれている。そしてそのソロ出かせぎ送り出し圏出身の(麵入り)ミートボールスープ売りの配偶者がジャムー売りであったり、その弟がアイスクリーム売りであったり、その友人がおもちゃ売りであったりすると想像すれば、ソロ出かせぎ送り出し圏出身のモノ売りの規模が数百万の規模であっても不思議はない。彼らが小郡小村にまで入り込みながら、文字どおりサバンからメラウケまでインドネシア全土に散らばっているようすもまた、集団規模の大きさを物語る。ジャムー、(麵入り)ミートボールスープ、鶏そば、アイスクリームなどがインドネシア人の日常生活において圧倒的な重要性をもつことから考えてみても、インドネシアの「インフォーマル・セクター」にソロ出かせぎ送り出し圏が果たしている役割は大きい。

(注18) ガジャ・ムンクルダム (ウォノギリ多目的ダム・貯水池、1976年工事開始/78年操業開始/81年完成) は、日本の政府開発援助 (ODA) によるブンガワン・ソロ流域開発基本計画にのっとり、建設された。これにより、ウォノギリ県周辺地域は、雨季は洪水、乾季は干ばつという長年の苦境を脱した。同ダム・貯水池の建設のために、ウォノギリ県の7郡に属する45村 (51村ともされる) が水に沈み、その住民のほとんどは、インドネシア政府によるトランスミグラーシ (transmigrasi, 英語の transmigration) 政策 (人口稠密なジャワ島から人口希薄なジャワ島外へと、住民を移転させる政策) に動員されながら、スマトラ島へ移住した。

(注19) 現在、ングトゥル郡界隈で農業労働者として雇われているのは、中ジャワ州ドゥマツ (Demak) 県や東ジャワ州パチタン (Pacitan) 県の出身者が多い。

(注20) ングンボロ (ngemboro) やングルンボロ (nglembo) ともいう。都市に定期的に移動しては、また村に帰る形の移動を意味する。水野 (1993, 83) では、「遠隔地で働くために移動し、長期に亘って遠隔地に滞在するが村に帰ることを前提とする」と説明されている。

(注21) 車のレンタル、レンガ作り、川での砂採取など建材関連業種、精米所、雑貨屋などが挙げられる。

(注22) 日本軍政期や続く独立戦争期を経てインドネシアが独立を果たす以前、オランダ東インド政庁の下にありながら、王侯家による名目的支配が許されたソロ地方では、すべての土地が王の所有であり、租税徴収請負人兼賦役労働徴発人を介して、耕作権と宅地権を付与された村びとにたいして、強制的な納税と労役の義務が負わされた。ひとりの村びとに与えられる耕作権は、村によって異なるが、0.5ヘクタール内外の水田にたいするものであった。耕作権の分割は原則的に許されず、ある村びとが亡くなると、子どものうちのひとりにそれが引き継がれることになっていた。しかし、実際には、耕作権のある水田を複数の子どもに分割して相続させる形が多かったため、ジャワ島のほかの場所と同様、ソロ地方の水田は年を追うごとに細分化されていった。A村においては、キャッサバやチークの木などを植えておく乾地 (畑地) が、水田を所有していない世帯をふくめ、たとえ猫の額ほどの広さであれ、ほぼ全世帯に所有されている。

(注23) 参考までに、2003年2月21日の日刊紙『コンパス』をみると、「ウォノギリ県の人口・住民登録局のデータによれば、2002年12月の時点で、11万404人の県民がウォノギリ県を離れ、出かせぎ (循環型移動) 中である」と記されている。

(注24) スキさん一家にたいする聞き取りは、

2001年1月に東ジャワ州マラン県シンゴサリ郡でスキさんに会って以来、同年3～4月（1カ月間）の中ジャワ州ウォノギリ県ジャティブルノ郡A村にあるスキさんの出身地での住み込み調査を経て、現在に至るまで、日常におこなわれてきた。調査の形をとるより、一家のレバラン（断食明け大祭）時のハラル・ビハラル（halal bihalal、家族成員が去年の過ちを互いに許し合う場）、冠婚葬祭、スラマタン（selamatan、共食儀礼）などをつうじて情報を集めることが多い。

（注25）同じジャカルタにいたということではあるが、詳しく聞き取りをおこなうと、兄弟姉妹は広くジャカルタ首都圏に散らばって出かせぎ経済活動をしていたことが判明する。スヤットさんは南ジャカルタ・カリバタ、スキヨさんはタンゲラン州タンゲラン市・チュンカレン、スルさんはタンゲラン州チモネ、スピさんは東ジャカルタ・チリリタン（のちに西ジャワ州ブカシに移転）で、それぞれ商売をしていた。

（注26）筆者が集中的に調査をおこなっていた2002年～07年ごろ、1000ルピアが約13円の交換レートであった。

文献リスト

〈日本語文献〉

- 加藤剛 1980. 「盾と矛? —— ミナンカバウ社会にみるイスラームと母系制の関係について ——」『東南アジア研究』18(2): 222-256.
- 1983. 「都市と移住民 —— ジャカルタ在住ミナンカバウの事例 ——」『東南アジア研究』21(1): 47-61.
- 加納啓良 1988. 『インドネシア農村経済論』勁草書房.
- 倉沢愛子 2007. 「外来者の流入と都市下層社会の変容 —— ジャカルタ南郊の集住地区の事例 ——」倉沢愛子編著『都市下層の生活構造と移動ネットワーク —— ジャカルタ、東京、大阪、サン・クリストバルのフィールドワークによる実証 ——』慶應大学東アジア研究所叢

書 明石書店 15-99.

- 関本照夫 1978. 「農業をめぐる人のカテゴリーと相互関係 —— 中部ジャワの一事例 ——」『国立民族学博物館研究報告』3(3): 345-415.
- 1980. 「二者関係と経済取引 —— 中部ジャワ村落経済生活の研究 ——」『国立民族学博物館研究報告』5(2): 376-408.
- ドゥイアント, ラファエラ D. 2005. 「カンボンとプダガン・クリリン —— 変容する路地裏空間とインフォーマル・セクターの地層 ——」吉原直樹編著『アジア・メガシティと地域コミュニティの動態 —— ジャカルタの RT/RW を中心にして ——』第6章 御茶の水書房 167-197.
- 早瀬保子 1984. 「ジャカルタのスラム —— 住民の特性と意識 ——」『アジア経済』25(4): 87-110.
- 福家洋介 1986. 「西ジャワ（パダレック村）の出稼ぎ農民」『アジア研究』32(3・4): 1-30.
- 1995. 「はたらきものの東南アジア」佐竹庸子編著『近くて遠い国 アジアを考える本3 はたらくアジアの子どもたち』岩崎書店 4-28.
- ポランニー, K. 1980. 『人間の経済 (1)(2)』岩波書店.
- 間瀬朋子 2008. 「『インフォーマル・セクター』のなかのソロ出かせぎ送り出し圏出身者」『上智アジア学』26: 195-212.
- 水野広祐 1993. 「西ジャワ農村における労働力移動と農村諸階層 —— プリアンガン高地の農村工業村の事例 ——」『アジア研究』39(3): 65-110.
- 村井吉敬 1977. 「インドネシアにおけるピマス計画と農業労働」『アジア経済』18(6・7): 29-50.
- 1978. 「インドネシアの民衆生業」『アジア研究』24(4): 57-82.
- 1979. 「開発戦略の転換とインドネシア社会」『現代インドネシアの社会と文化』現代アジア出版会 173-263.
- 2000. 「インドネシアの開発再考 —— スハ

- ルト体制の崩壊と開発——」後藤乾一編『インドネシア——揺らぐ群島国家——』アジア太平洋研究選書1 早稲田大学出版部 59-97.
- 山下晋司 1986. 「ウジュン・パンダンのトラジャ社会——インドネシア地方都市研究——」『東南アジア研究』23(4): 419-438.
- 山本郁郎 1990. 「インフォーマルセクターと都市労働市場——労働移動とスキル形成の視点から——」『金城学院大学論集』通巻(140)社会科学編(33): 1-64.
- 1999. 「人口動態と就業構造の変動」大阪市立大学経済研究所監修 宮本謙介・小長谷一之編『アジアの大都市2 ジャカルタ』167-202.
- 米倉等 1986. 「ジャワ農村における階層構成と農業労働慣行」『アジア経済』27(4): 2-35.
- 〈外国語文献〉
- Abdul Hamid and Imam Ahmad 1992. “Perubahan Ekonomi dan Resistensi Budaya: Studi Kasus pada Pedagang Soto Taman di Jakarta [経済の変容と文化の抵抗——ジャカルタにおけるタマン村出身のソト売りの事例——].” *Prisma* (5)(May): 39-50.
- Azuma, Yoshifumi 2000. “Socioeconomic Change among Beca Drivers in Jakarta 1988-98.” *Journal of Labour and Management in Development* 1 (6) [<http://hdl.handle.net/1885/41826> 現在はネットサイトで閲覧不可になっているもよう].
- 2001. *Abang Beca: Sekejam-kejamnya Ibu Tiri Masih Lebih Kejam Ibukota* [ベチャッ引き——どんなに継母が残忍であるとはいえ、首都はもっと残忍である——]. Jakarta: Pustaka Sinar Harapan.
- Badan Pusat Statistik [インドネシア中央統計局] 2005. *Wonogiri dalam Angka 2005* [2005年数字でみるウォノギリ県]. Kabupaten Wonogiri [ウォノギリ県].
- Evers, Hans-Dieter 1975. “Urbanization and Urban Conflict in Southeast Asia.” *Asian Survey* 15 (9)(September): 775-785.
- Hugo, G. J. 1977. “Circular Migration.” *BIES* 13 (3) (November): 57-66.
- Jellinek, Lea 1991. *The Wheel of Fortune: The History of a Poor Community in Jakarta*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Murray, Alison 1994. *Pedagang Jalanan dan Pelacur Jakarta: Sebuah Kajian Antropologi Sosial* [ジャカルタの露天商と売春婦——ひとつの社会人類学的考察——]. Jakarta, LP3ES (原著は1991. *No Money, No Honey: A Study of Street Traders and Prostitutes in Jakarta*. Singapore: Oxford University Press) (邦訳は熊谷圭知ほか訳『ノーマネー、ノーハネー——ジャカルタの女露天商と売春婦たち——』木犀社 1994年).
- Papanek, Gustav F. 1976. “Penduduk Miskin di Jakarta [ジャカルタの貧困住民].” *Prisma* (1) (February): 59-83.
- Gondowarsito, Ria 1990. “Transmigrasi Bedol Desa: Inter-Island Village Resettlement from Wonogiri to Bengkulu.” *BIES* 26 (1)(April): 48-68.
- 〈新聞〉
- Kompas*. 2003. Editional 21, Feb.
- (上智大学アジア文化研究所客員所員・非常勤講師、2009年1月7日受領、2010年5月11日、レフェリーの審査を経て掲載決定)